

“全カリ”、もうひとつの横顔

藤野 裕介

“全学共通カリキュラム（通称、全カリ）”とは、「カリキュラム」であり、「運営組織」であり、「教育革新の運動体」、と位置づけられている。必ずしもそう理解はされてはいないかもしれないが、少なくとも、設立の経緯からその3役を担ってきた事実は疑う余地がない。誕生から20年余りが経過し、言語と総合という2本のカリキュラムを擁する全カリは、全学で支えるという理念のもと、時に安定し、時に不安定化し、その都度都度で多くの教職員によって担われてきた。

さて、全カリ、特に総合教育カリキュラムは、その扱う科目の多彩性や融合性により、学問の知的営みがコラボレーションできる特性を有している。「総合B」に始まり現在は「主題別B」と称し、次期カリキュラムでは「コラボレーション科目（B科目）」として、異なる知の交流を目指さんとする全カリの財産ともいべき科目群がある。教員同士の連携協働、また研究所や事務部局のかかわりも積極的に活かしつつ知的な交流を実現できるこの科目群は、ある意味、本学の全カリらしさを体現しているシンボルといえるのではないだろうか。

そして、このような知的な交流を生み出し、多くの教職員が全学共通のカリキュラムについて自由に意見交換し、議論し、語り合える場、そういう空間が自ずと必要になってくる。その交流拠点（＝たまり場）こそ全カリであり、物理的空間としての全学共通

カリキュラム事務室（通称、全カリ事務室）なのであろう。これは全カリ事務室という空間で7年近くを過ごした私の実体験に基づいた感想である。コーヒーを片手によもやま話に花を咲かせつつ、フットすると新カリキュラムや授業のこと、新しい科目の企画構想など、そういった話題が事務室の職員を巻き込みながら始まってしまい、いつしか真剣な議論が繰り返されている。各々が思う大学教育についての熱い気持ちが、教員や職員の枠を越えて語り合える場、知的な、そして人と人が大学教育について交流する拠点としての全カリ事務室は、まさに“たまり場”であり、“サロン”となるのではないか。

2016年度から始まる全学的新カリキュラム（学士課程統合カリキュラム）では、学部と全カリという捉え方が大きく変わる。それに伴って、全カリ、また全カリ事務室の役割も変化することになる。しかしながら、全カリ（事務室）が従前より培ってきた知的交流の場としてのたまり場（＝サロン）という機能は、そもそもの全カリという理念とともに、その役割をより一層果たすことが求められよう。そういう場のある大学こそ、大学らしいのではないだろうか。

（追悼：このサロンに集うメンバーのひとりであった平野隆文学部教授（前、総合チームリーダー）が、2015年2月3日に逝去された。本誌第15号に

掲載のモノローグ“理想が現実と瞬間的に戯れる教育的美学の戯画的実践”のタイトルを紹介しつつ、謹んで哀悼の意を表したい。)

ふじの ゆうすけ

(本学職員／

教務部全学共通カリキュラム事務室)